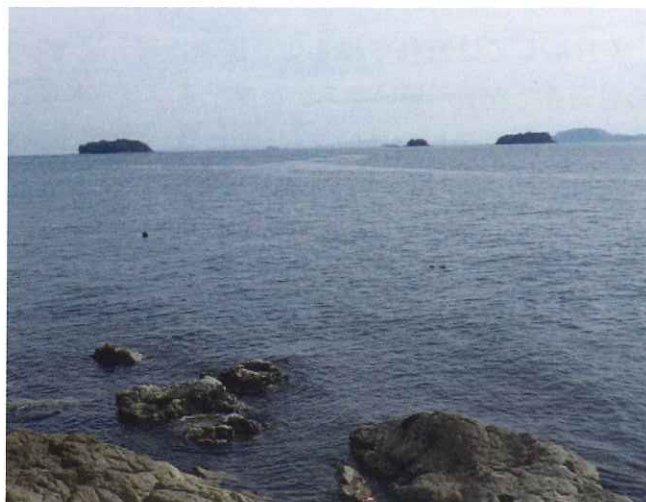


## 金ヶ崎の流紋岩

兵庫県自然保護指導員 日本地質学会会員 橋元 正彦

目の前に広がる瀬戸内海には、3つの唐荷島やいくつかの家島の島々が浮かんでいた。大地が海に沈み、山地の頂部だけが島として残った多島海と呼ばれる景観である。観察会の日には空気が澄んでいて、遠くに明石海峡大橋や鳴門大橋も見えた。

展望台から坂を下ると、金ヶ崎の先端に出た。海岸には、岩壁から割れ落ちた大きな岩が積み重なっている。岩の表面は酸化鉄が浮かび上がって赤っぽいのが、割ってみると内部は薄い灰色～薄いだいだい色。よく見ると、縞模様があることがわかる。この岩は流紋岩で、縞模様はマグマが流れ動いた跡である（流理という）。



金ヶ崎から見る3つの唐荷島



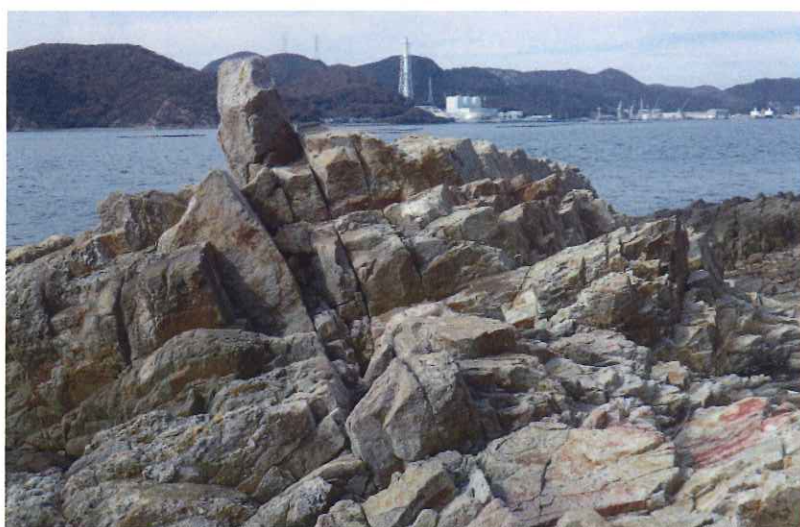
流紋岩 流理に沿って割れ目が発達



採集した流紋岩 流理がよく分かる

この流紋岩は、天下台山流紋岩と呼ばれていて、相生市の北の山地から天下台山を通り、金ヶ崎の沖の蔓島まで続いている。この天下台山流紋岩の西の赤穂市周辺には、火砕流でできた溶結凝灰岩などの地層が広く分布している。

今から8200万年前、このあたりで大きな火山噴火があった。噴出したマグマは、火砕流となって地表をおおった。そして、地下のマグマだまりが空洞となったために大地が陥没し、そこにカルデラができた。金ヶ崎で見られる流紋岩は、そのカルデラの縁にできた割れ目に沿ってマグマが貫入し、そこで固まったものと考えられている。こんなことが最近になってわかってきた。



冷却節理の発達した流紋岩

8200万年前というと、地球上に恐竜が栄えていた白亜紀と呼ばれる時代である。石を調べると、そんな昔の大地の営みが浮かび上がってくる。目の前に広がる風景を見ながら、かつてこの大地に起こったことが想像できるようになると、自然を見る楽しみがまた一つふえるかもしれない。